

## I サムエル 2 章 12～36 節「対照的な両者」

信仰生活を続けていると、いつもしていることを同じように続けていて、それでよしとしているかもしれません。改めて自分の行いを顧みる時が必要だと思います。

### 1. エリの息子たちの罪（：12～17）

主に仕える者とそうでない者の対比があり、厳しい批判となっています。12 節。祭司の息子たちですが、知識としては知っていたでしょうけれども、主を恐れ、敬い、主に仕える思いがなかったことが分かります。「民に関する祭司の定め」に従っていませんでした。主の家で民が主へのささげ物を献げ、礼拝しているときに、「祭司の子弟」がやって来て、いけにえの一部を勝手に取り上げて自分のものとしていたというのです。しかも、それが恒常的に行われていたのです。

15 節からはいけにえの動物の「脂肪」に関することが取り上げられています。通常は、いけにえの内臓から脂肪を取り分け、その脂肪を祭壇で焼き尽くします。けれども、主に献げるべきことを行う前に、祭司の子弟が礼拝者を脅すようにして、ささげ物を取って行ったというのです。自分の思いのままに、やりたい放題に行なっていたという状況でした。一般の礼拝者たちが衝撃を受けるような異常事態が起こっていました。

ですから、彼らの行いは「主の前で」非常に大きな罪であった、また「主へのささげ物を侮った」と言われています。主の御前で仕えるはずの彼らが、主の御前にあることを微塵も考えていなかったようです。

私たちの立場で主へのささげ物を侮ることはないでしょうか。主の定めに従うことが主に従うことです。定められている通りに献げていても、それが形式的になってはならないという警告が聖書の中にあります。しかし、それは献げられた上でのことです。それ以前の問題として、定められていることに従わないことはささげ物を侮ることではないでしょうか。

### 2. 少年サムエルと家族（：18～21）

そのような主の前に罪を犯していたエリの息子たちと対照的であった少年サムエルのことが次に書かれています。18 節。ここでは 11 節にあった「祭司エリのもとで」ということばがありません。おそらく、サムエルと主との関係を強調し、サムエルが成長していることも含んでいるのでしょう。

サムエルのことを「幼いしもべ」と言っています。ヘブル語では 11 節の「幼子」、21 節の「少年」と同じことばです。サムエルが「亜麻布のエポデ」を着ていたということです。祭司の家系ではないですが、生涯を主に献げた者として主の家で祭司のように仕えていたのでしょう。それで「幼いしもべ」と訳しています。

また、エリの息子たちのことを「祭司の子弟」と 13 節、15 節で言っていますが、「子弟」もヘブル語では同じことばです。「若者」とも訳されるこのことばがエリの息子たちにも、サムエルにも使われていて、その両者を対比して語っているのです。主の前に罪を犯していたエリの息子たちと対照的にサムエルは「主の前に仕えていた」ことが強調されています。

そのサムエルを主に献げたハンナのことが再び書かれています。19 節。毎年、主の家に礼拝のために行くときに、ハンナはサムエルの成長に合わせて上着を作り、届けました。ハンナの愛と祈りが背後にあって、サムエルの主に仕える歩みが支えられていたことを思います。

そして、サムエルを献げたハンナにはその後 3 人の息子と 2 人の娘が与えられました。アブラハムがイサクを献げたとき、イサクを失うことなく、その後ヤコブを通して多くの子孫を与えられたのと同じように、神様は祝福してくださいました。ハンナが主に献げた以上のものを主は彼女に返してくださいました。

神を愛し、神のみこころにしたがって生きようとする人に対して、神は今も同じように祝福してくださいます。

### 3. 主のさばきのしるし（：22～26）

再びエリの息子たちの状態について書かれています。さらに少し年月が経ったようです。22 節。彼らの罪深い状態を例証することが書かれています。「会見の天幕の入り口」で下働きをしていた女性たちと寝ていたというのです。主が臨在を表し、主が民にお会いくださる「会見の天幕」であるのに、そこで仕える祭司が主を恐れず、罪を重ねていました。

さらに息子たちはエリの警告も聞こうとしませんでした。息子たちが行っていたことも罪でしたが、父親であり大祭司であるエリの警告を聞かなかったことも罪でした。彼らの心がそのように頑なになったのは、主のさばきのしるしでした。

ここで「彼らを殺すことが主のみこころだったから」ということばに疑問が生じるかもしれません。神のみこころと人の責任の関係です。これは説明するのが難しい問題です。彼らは「よこしまな者たち」でした。自分たちの罪の結果、滅びなければなりません。そして、彼らが心を頑なにしていまい改めようとしなないことは主のさばきのしるしでした。しかし、これは彼らに責任がないということではありません。ちょうど出エジプト記のファラオと同じようです。彼らが滅びたのは意図的に神を拒絶したからです。

エリは「主に対して人が罪を犯すなら、だれがその人のために仲裁に立つだろうか」と言いましたが、律法によって定められたささげ物や祭司の働きによって神と人との間の仲裁がありました。さらに、それらによって指し示されていた方がいます。

神はやがて罪人のためにご自身との間に仲裁する方を立て、聖書はこの問いに対する答えを教えてください。「神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです」(1テモテ2:5)。すべての人は神の前に罪人です。そのままでは聖なる、義なる神にさばかれ、滅びるしかありません。しかし、神は愛によって、罪人が滅びることを望まず、御子をこの世に与えてくださいました。神の御子が人となり、罪のないお方が人のすべての罪をその身に負って十字架で死なれました。イエス・キリストが罪のさばきを受けて死なれ、三日目によみがえられて、神と人との間の仲介者となってくださいました。イエス・キリスト以外に仲介者はいません。イエス・キリストを信じるなら、誰でも罪を赦していただき、神との平和を与えていただけるのです。これが聖書の語る福音です。

26節には、少年サムエルのことが再び書かれています。「少年サムエル」ということばが繰り返され、話が続いていることが分かります。そして、エリの後継者は彼の息子たちではなく、サムエルであることが示されています。

「少年サムエルは、主にも人にもいつくしまれ、ますます成長した」とあります。このことばと似ていることばがルカの福音書にあります。少年時代のイエス様について、「イエスは神と人にいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった」(2:52)と書かれています。神様が導かれる救いの歴史の中で、やがて主イエス様へとつながっていくことを暗示しているかのようです。

#### 4. 主が告げたことば (: 27~36)

エリの息子たちが罪を犯し続け、エリも息子たちを正すことができない中で、主はエリにご自身のさばきを伝えます。「神の人」がエリのところにやって来ました。主がその人を遣わし、主のことばを語らせませす。

27~28節。出エジプト以来、主がアロンの家系を祭司として選び、祭司の働きをするように決めました。また、民のささげ物によって祭司が生活できるように決めました。けれども、エリはその働きを自ら蔑んでいると言われます。

29~30節。主へのささげ物を「足蹴にする」と言われます。息子たちの態度のことです。そして、エリは主よりも「自分の息子たちを重んじて」と言われます。息子たちの罪の行いを止めさせることができず、大祭司として罪を犯す祭司を裁くことができないエリは、主よりも息子たちを重んじているのです。主に従うことを第一としていないのです。それゆえに、エリの家系はさばきを受けると宣告されてしまいます。

31~32節。「見よ、その時代が来る」とは預言者がしばしば語ることばです。神のさばきの日がやがて来る、必ず来ることの宣告です。エリの家系には年長者がいない、皆若くして死んでしまうという苦しみを経験することになります。

33~34節。エリの家系が断絶しないように、主が「一人の人を断ち切らない」ということもあるけれども、エリの家系は神のさばきを受け、苦悩を経験していくというのです。ほとんどの者が剣によって死ぬことになります。将来に起こるそのようなことをエリは見ることにはないですが、二人の息子が同じ日に死ぬという悲劇を経験することになります。それが主のさばきがあることのしるしとなるというのです。

35~36節。主のみこころに叶い、主に従う「忠実な祭司」の家系が、エリの家系とは別に立てられます。「彼は、わたしに油注がれた者の前をいつまでも歩む」との預言は、後にダビデ王によって守られた祭司ツァドクの家系において成就したと考えられています。一方、エリの家系の者は、極度の貧しさの中で苦しむことになると言われます。

このような厳しいさばき主によってエリに告げられました。「神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります」(ガラテヤ6:7)。エリと息子たちが主へのささげ物を侮り、主を蔑んだ結果が、子孫にもさばきをもたらすことになったということを心に留めなければなりません。

そして、「わたしを重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む者は軽んじられる」との主のことばを覚えていたいと思います。「まず神の国と神の義を求め」者を神は守り、祝福してくださいませ。神を恐れ、敬い、愛し、従う者であること、神とのふさわしい関係の中に生かされていくことの大切さを教えられます。

私たちがそのような神との関係のうちに生きていくことができるように、イエス・キリストが来てくださいました。

主へのささげ物を侮ることがないかどうか、主を第一としているかどうか、主の警告を聞く耳を持っているかどうかと問われます。私たちは主の前に仕える者でありたいと願います。主を重んじる者でありたいと願います。それぞれが置かれている生活の場で、仕事の場で、心に引っかかっている自らの態度や行動はないでしょうか。主の前に仕えるためにそれで良いでしょうか。主を重んじるためにどうしたら良いでしょうか。祈りのうちに、思い巡らしましょう。みことばに従いましょう。